

10) アマリリス

アマリリスは純然たる園芸品種で、この花の原種は存在しない。通常アマリリスとして鑑賞用に栽培されている品種は、分類学上はヒガンバナ科『*Hippeastrum*』属に属する多年草で『*Amaryllis*』属ではない。中央アメリカ、南アメリカが原産のベニスジサンジコ、キンサンジコ、ジャガタラ水仙などの原種を交配させて、人間の手で作り出したものなのである。これが日本ではアマリリスになってしまったのは、南アフリカを原産とする本来のアマリリス(*Amaryllis Belladonna*)に、花形がよく似ていたためであろう。日本で現在アマリリスと呼んでいるものの正式な学名は、『*Hippeastrum hybridum*』である。属名『*Hippeastrum*』の「hippeos」は、騎士を意味し「astron」は星を意味するギリシャ語で、この二つの語を合成したものである。「*hybridum*」はいわゆるハイブリッドのことで、雑種を意味しており、イギリスでは『*Knight star lily*』、これだとすぐに理解できよう。どちらにしてもアマリリスに似て非なる植物を、日本ではアマリリスと称してきたのである。アマリリスの名はもととはといえばローマの詩人ヴェルギリウスの詩に登場する、羊飼いの美しい娘の名前であった。これが本来のアマリリスの属名だったわけで、日本では江戸時代末期より、前述の『*Hippeastrum*』属の呼称になってしまったのである。

アマリリスが日本に渡来したのは幕末の、天保から安政年間(1830~1860年)のことといわれ、輸入された植物はアマリリスというには程遠い、原種ヒガンバナに近いものであったらしい。輸出業者にだまされたものか、はたまた何かの間違ひによるものかははっきりしないが、以来ずっと日本ではアマリリスと呼ばれてきた。しかし植物の世界ではむしろこのようなことは当たり前で、現在のように球根や苗木の名称や商売上のタグが着いているわけでもないし、ましてやコンピューターのような便利な記憶装置がなかった時代、ちょっとした手違ひが正式な名前になってしまうのである。チューリップの本当の名前が『ラーレ』であったという話にもよく似ているが、植物名の世界ではこの手の話は極めて多い。

アマリリスは水耕栽培で簡単に花を咲かせることができるものの、翌年も花を見るためには路地植えがいい。球根は春、霜の季節が終わる頃に植えて、花を夏に咲かせる。秋口になると葉が枯れてくるから、球根を掘り上げて暖かいところに保存し、翌年また同じことを繰り返す。これは日本で栽培されているアマリリスがもともと熱帯性のものが多いためである。肥料は多めに与えて、葉には赤斑病が着くことがあるので、時々殺菌剤で消毒してあげるとよい。マンションや室内の日陰でも、数時間、陽に当てるだけで、美しい花を咲かせてくれる。

日本で人気の品種は主にオランダのルードウィヒ社で改良されたものである。その特徴は巨大輪、丸弁、多花性で、花色も単色で原色に近い赤、桃、サーモンピンク、オレンジなどで、鮮やかな美しい品種も改良されて、なかなか華麗である。



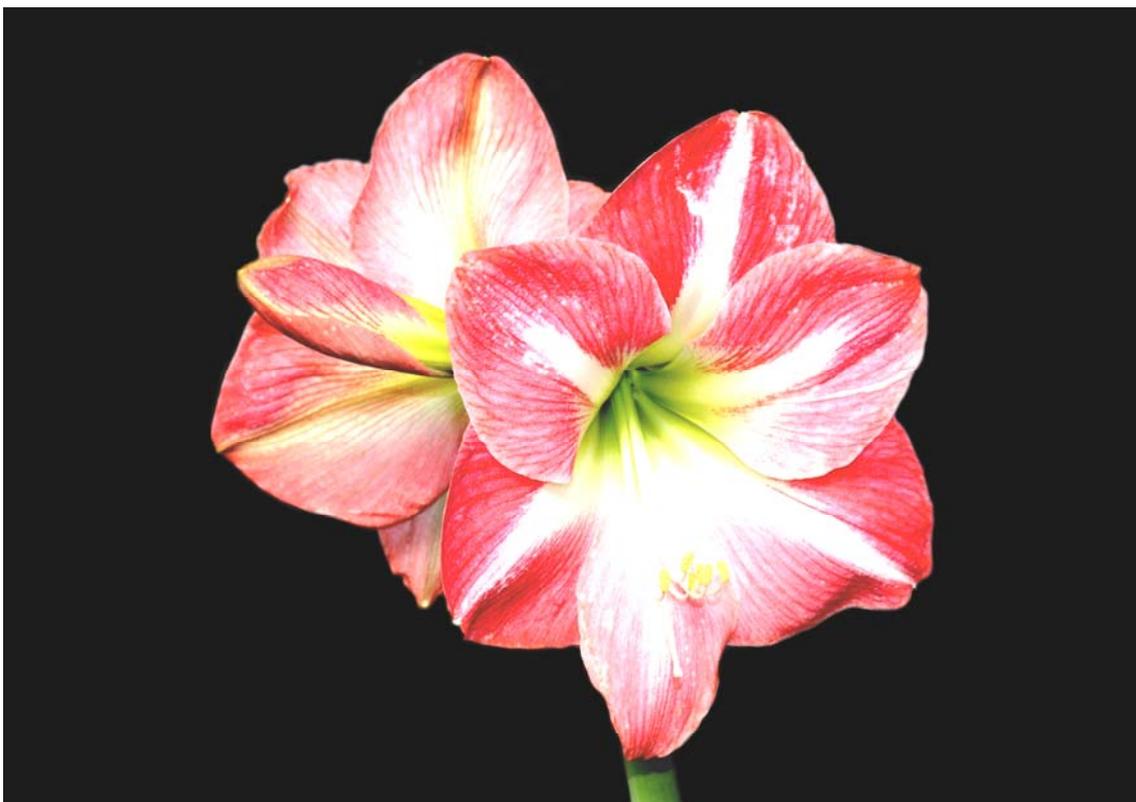
アマリリスはスイセンやいろいろな植物の雑種で、人工的に作り出された種である。日本へは幕末に渡来し、現在ではオランダ産が幅を利かせている。(埼玉県深谷市:品種名不詳)。



現在では水耕栽培なども行なわれている(埼玉県深谷市:品種名不詳)。



アマリリスは鮮やかな赤系の花が多い。この花はアマリリスよりもユリの花に近い花形である。



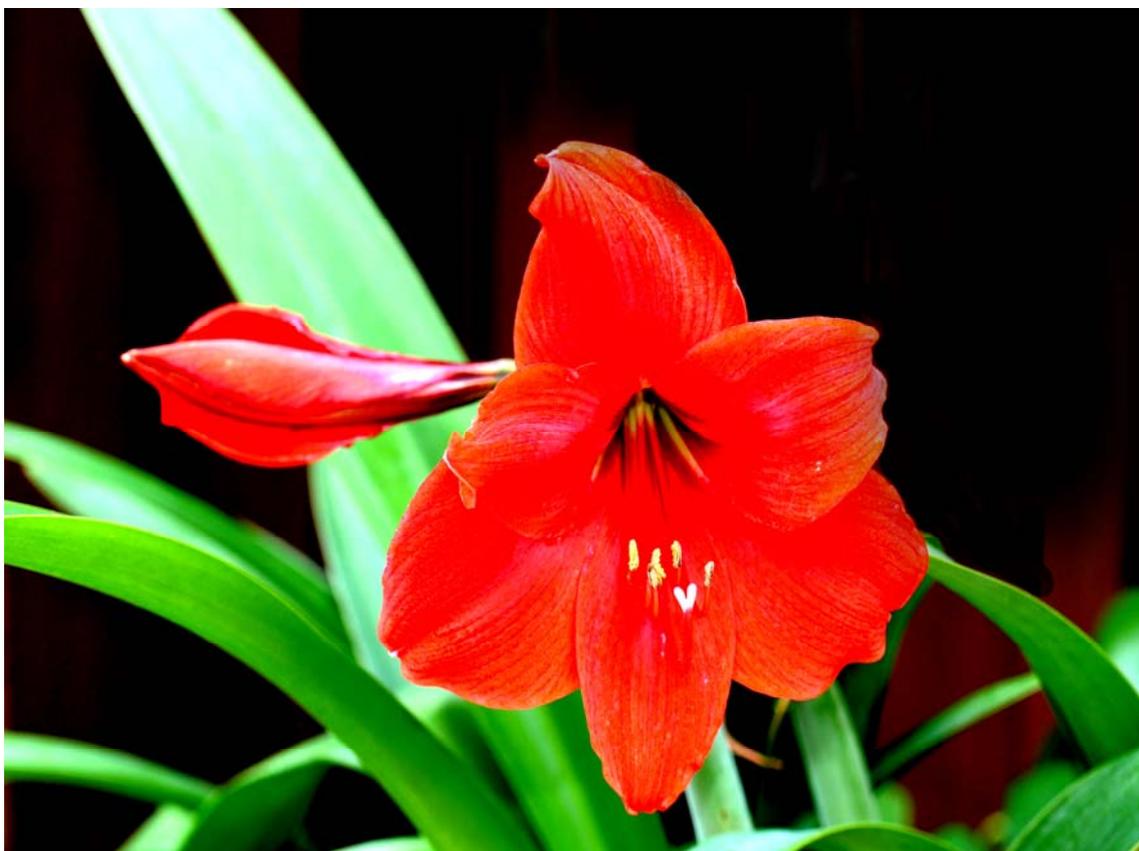
子供の顔ほどの大きな花を咲かせる大輪アマリリス。



これも巨大輪のアマリリスだが珍しく八重咲である(埼玉県深谷市)



八重咲の大輪アマリリスである。新築された玄関の前で誇らしく咲いていた(さいたま市浦和区)



アマリリスには種々の色やカタチがあるが、この花は素直な銘花である(さいたま市浦和区)



大輪アマリリスも種類が増えており、赤の濃淡がいろいろである。



大輪アマリリスである。兎の耳のように見えているのはこれから開く蕾である。 [目次に戻る](#)